

「カナ」「カシラ」に関する考察

カノックワン・ラオハブラナキット

1. はじめに

1.1 問題のありか

本研究では、「太郎はパーティへ行くかな/かしら」に見られる「かな/かしら¹」という文末形式を取り上げる。

「カナ」「カシラ」に関しては、いくつかの先行研究がある(例えば、国立国語研究所1951,1960、仁田1991、森山1989)。しかし、ほとんどの先行研究では「カナ」「カシラ」の形態的な研究²やその意味³に止まり、「カナ」「カシラ」の具体的な使用条件の考察はなされていない。しかも先行研究はこの二形式を区別せずに同じように扱っている。本研究ではこの二形式に差異があると見て考察を行う⁴。特にこれまで指摘されていない「カナ」は使えるが「カシラ」は使えない次のような現象に注目して分析する。

- 1) 「さて、行くカナ/?カシラ。—ああ、いいよ。これくらいは僕がおごる」

「いいんですか」と、智子は言って、「ごちそうさま」と頭を下げた。

(眠り、p.127)

- 2) 「…でも、そういう人も、逃げられるわけじゃないのよ。警察には捕まらなくても、自分の中にあるものから逃げられないんだから」

「良心、ってこと？」

「ちょっと違うカナ/?カシラ。」

と、智子は首を振って、「似てるけど、少し違う。」(眠り、p.275)

1.2 本研究の目的と考察の観点

本研究は「カナ」「カシラ」の意味と使用条件を明確にし、さらに文類型における位置づけを示すことで両形式の差異を考察することを目的とする。

1.2.1 意味と使用条件

本研究は1.1で挙げた先行研究などを参考にして、「カナ」「カシラ」の基本的な意味を『不定自問』と設定する(2.1で後述する)。そして、「カナ」「カシラ」の用法と使用条件を考察する際、二形式の持っている基本的な意味(『不定自問』)がどのように派生しているのかに焦点をあてる。また、使用条件を検討するために、「カナ」「カシラ」の前に現れる命題を構成する「主格名詞(句)」の人称を手がかりにする。モダリティを表す文末形式と主格名詞句の人称とは関連があるという指摘(仁田1991など)は既に見られ、

文末形式と主格名詞句の人称の関連の重要性を物語っている。本研究もこの観点に注目し、例えば「太郎はパーティへ行くカナ/カシラ」では、命題である「太郎がパーティへ行く」を構成する主格名詞が「太郎」となるが、こうした人称による使用条件を探る。

また、「カナ」「カシラ」の使用条件をより分かりやすくするために「カ」⁹と「ダロウカ」という別の疑問文文末表現の形式も取り上げて比較考察をする。「カ」は疑問文文末表現の形式の中で最も「問いかけ性」があるもので、疑問文文末表現の代表的な形式であり、「ダロウカ」は「カナ」「カシラ」とほぼ同じ意味を持つものとして扱われることが多い（木村・森山1992、森山1989、三宅1993など）からである。また、別の疑問文文末表現を取り上げて考察することによって、「カナ」「カシラ」を文類型全体の中でより体系的に位置づけることができる。

1.2.2 文類型における位置づけ

一般に、日本語の文類型には、『述べたて文(平叙文)』、すなわち話し手が聞き手に未知の情報を与える文と、『問いかけ文(疑問文)』、すなわち聞き手から情報を引き出す文とがある(cf. 安達1992)。しかし、この二つの文類型は、文末形式との関係から、従来指摘されているほど明確に分けられるものではないことが指摘されている（益岡1987、安達1991、1992など）。すなわち、典型的な『述べたて文』が一方にあり、典型的な『問いかけ文』がもう一方にあるとすると、その間に「述べたて文に近い文」や「問いかけ文に近い文」などが存在し、両者は連続的なつながりを持つものと考えられるのである。そこで、本研究ではこの文類型の連続性の観点から「カナ」「カシラ」が『述べたて文』と『問いかけ文』との間の中でどのような位置付けを持つかを示すことで両語の差異を検討する。

考察の手順として、まず「カナ」「カシラ」の基本的な現象の整理をし、そこから派生した用法の使用条件を「カ」「ダロウカ」と比較しながら見る。その後、文類型の連続性という観点から「カナ」「カシラ」の差異を検討し、最後に、文類型全体における位置づけを試みる。なお、考察のための用例は、小説、シナリオ、対談から収集したものと実際の電話での会話を録音したテープを書きおこしたもので、それに作例よりなる。

2. 「カナ」「カシラ」の意味と派生した用法⁹

2.1 「カナ」「カシラ」の基本的な意味

「カナ」「カシラ」の基本的な意味は次のように設定することができる。

「カナ」「カシラ」は『不定自問』を表す：話し手にとって不明な部分があり、その判断が確定できないので「自問」している。

用例を次に示す。

- 3) …早く家へ帰ってマッサージを頼み、水母くらげのようになってグッスリと眠りたかった。でも、これから帰ったのでは、いつも頼んでいる按摩さんの予約が取れるカシラ。

いやだわ。(朱い・待つて、p.28)

4) (小山田は待ち合わせの場所に向かうところ)

三時だ。小山田は席を立った。(中略)昼休みと違って、人っ子一人いない。

「来ていないのカナ」と小山田は呟いた。(理由・ミス、p.49)」

3) では「いつも頼んでいる按摩さんの予約が取れる」かどうかは、話し手にとって不明でその判断が確定できなくて自問している。4) も同様な自問の状況である。このような『不定自問』を表す「カナ」「カシラ」は「自問」という性質のため、相手の存在を必要としない独話的な状況で使われることが多く、したがって、主格名詞句は一人称(例3))または三人称(例4))を取りやすい。

2.2 「カナ」「カシラ」の派生した用法と使用条件

次の例で示す「カナ」「カシラ」の派生した用法を『自問的問いかけ』と仮に呼ぶ。

5) 「嫁さんはどんな色の洋服を着てたのカナ」

「さあ、そこまでは…。」(西瓜・待つて、p.154)

6) 「…あなたがいない間も、ほとんど話し合いならなかったから。あの幽霊話が出た時、見込みがないような気がしたのよ。誰があんな与太話を真に受けるもんですか。時間稼ぎの意図が見え見えだわ。やっぱり、別の買い手がいるのカシラ」

「いや、それはいないと思う」(緑・密室、p.252)

上記の例は、話し手はある情報を得たいが、聞き手はその情報を明確に持っていても良い、という対話の状況である。すなわち、話し手が自問の形式で述べることによって、間接的に聞き手から情報を得ようという意味合いを持っている。この場合、答えるかどうかは聞き手の判断に委ねられる。このような『自問的問いかけ』の用法は、聞き手が存在する場合にのみ見られ、しかも命題内容が聞き手自身に関するものでないことが多い(聞き手自身に関するものであれば、次に見る『疑似問いかけ』となる)。したがって、「カナ」「カシラ」の主格名詞句は三人称を取りやすい。

また、「カナ」「カシラ」には、やはり対話の状況で、聞き手から情報を得ようと問いかける用法—これを『疑似問いかけ』と仮に呼ぶ—がある。例を見てみる。

7) 「ケガは？でてこれるカナ」

「私は…なんともないわ」

女はぼくに手を差し出すと小さな窓から器用に両肩をだした。(雪・やっぱ、p.167)

8) 純子 「私のこと、なんか怒っているのカシラ？」

里美 「そんな…」(大人、p.132)

7) 8) はいずれも話し手が聞き手の存在を積極的に意識し、聞き手自身の情報について問い掛けている。したがって、このような『疑似問いかけ』においては「カナ」「カシラ」の主格名詞句は二人称を取りやすい。そして、この場合の「カナ」「カシラ」は、通常疑問文の「カ」に言い換えられるが、「カ」を用いたときほど積極的な疑問文とはならない。以上「カナ」「カシラ」の意味と派生した用法を表1にまとめる。

表1 「カナ」「カシラ」の意味と派生した用法のまとめ

意味/派生した用法	意味・用法の説明	条件の例
不定自問	話し手にとって不明な部分がありその判断が確定できないので自問する。	独話の状況 主格名詞句が一人称、三人称
自問的問いかけ	話し手がその情報を得たいが、聞き手がその情報を明確に持っていなくても良い。	対話の状況 主格名詞句が三人称
疑似問いかけ	話し手が積極的に情報を得たい。また、聞き手自身の情報を問い掛ける。	対話の状況/相手の存在を積極的に意識する 主格名詞句が二人称

3. 主格名詞句の人称

2.で見られるように、主格名詞句の人称は「カナ」「カシラ」の派生用法の条件になっている。ここでは、「カナ」「カシラ」の使用条件をより理解するために、「ダロウカ」「カ」の形式における主格名詞句の人称の使用条件を示し比較してみることにする。ただし、「カナ」「カシラ」の用例と重なっている部分にのみ焦点を当てて述べる。

3.1 「ダロウカ」の使用条件

「ダロウカ」は先行研究によって「カナ」「カシラ」とほとんど同じ意味を持つものと指摘されている(木村・森山1982, 森山1989, 三宅1993など)。実際、「カナ」「カシラ」と「ダロウカ」の文は言い換えられる場合もあり、2.で挙げた『不定自問』の基本的な意味は三者とも持っていると思われる。9)はその例である。

9) 一小山田が、ウーンと呻いて、寝返りを打つ。

都江は、迷ってた。一夫に話すべきダロウカ? (理由・ミス, p.35)

また、三宅(1993:70)は、「ダロウカ」には「弱い質問」という派生的な意味があり、「聞き手が存在し、その聞き手は当該の情報を明確に有していないが、話し手は当該の情報を欲している、ということが明らかである」という文脈の条件が必要であると述べて、次の例を示している。これは、本研究で呼ぶ『自問的問いかけ』という用法に近い。

10) 「ジープでも無理ダロウカ」「いや、ジープでもとてもはいれんべ。さっきの電話じゃ北電の除雪車が何も見えてあきらめたらしいから」(三宅1993の例)

このように、「カナ」「カシラ」「ダロウカ」には共通した意味・用法がある。しかし、通常「ダロウカ」は主格名詞句に二人称を取ることができない⁷⁾ので、主格名詞句に二人称をとる『疑似問いかけ』の派生用法は持たない。

11) ?(あなたは)日本人ダロウカ。

12) ?(あなたは)寂しいダロウカ。

これについて森山(1989:103)は「疑問文におけるダロウは聞き手に情報がないものとして扱うという機能になる」と述べ、牧原(1994:82)は「聞き手が話し手の要求する情報を持っていることが明らかなコンテキストで～ダロウカを用いると、聞き手の持

つ情報を無視して自問自答するという意味が生じ、不自然な表現となったり、尊大な表現となったりする」と指摘している。すなわち、聞き手の持つ情報（聞き手自身のことや聞き手の感情）を尋ねる場合（主格名詞句が二人称である場合）には、「ダロウカ」は使いにくいのである。

また、「ダロウカ」と共起する主格名詞句の人称について次のような調査を行った。実際の電話での会話を録音したテープ（20会話、約45分）とシナリオ（1編）・小説（短編小説21、長編小説3）・対談（1編）から「ダロウカ」を取り上げて、主格名詞句の人称を調べたのである。結果、全ての例、66例のうち、一人称が使われているのは8例で、三人称が58例である。二人称の主格名詞句と「ダロウカ」との共起の例は一つも見られなかった。この調査結果は「ダロウカ」が二人称の主格名詞句と共起しないことを裏付けるものである。

3.2 「カ」の使用条件

最も問かけ性がある「カ」は当然『問いかけ』の用法を持っている。そして、主格名詞句が二人称である命題について問い掛ける時に「カ」は現れることができる。

13) (あなたは)日本人ですカ。

3.3 「カナ」「カシラ」の使用条件

2.2で見た通り、「カナ」「カシラ」は一、三人称だけでなく、二人称主格名詞句と共起することができる。これは、「ダロウカ」と異なる。しかし、二人称主格名詞句と共起できるとしても、「カ」と全く同じ使用条件を持っているというわけではない。「カ」は主格名詞句に二人称を取り、述語に感情形容詞を取る通常疑問文に使うことができるが、「カナ」「カシラ」は使えないのである。

14) (君は)さびしいカ。

15) ?(君は)さびしいカナ/カシラ。

したがって、派生した用法『疑似問いかけ』の「カナ」「カシラ」は「カ」と同じ条件を持つものではない。これは、「カナ」「カシラ」がそもそも基本的な意味として『不定自問』を表すものであり、聞き手に直接問い掛ける機能は本来持っていないため、感情形容詞を使い聞き手の感情を問かけするような問かけ性が強い場合には使えないためである。こうしたことから、二人称主格名詞句との共起の制限に関して、共起の容易さを基準とした序列関係が「カナ/カシラ」「ダロウカ」「カ」の間で次のように想定できる。

「カ」> 「カナ/カシラ」> 「ダロウカ」（共起しやすい>共起しにくい）

以上、3.のまとめとして、次の表を示す。

表2 「ダロウカ」「カ」と比較した場合の「カナ」「カシラ」

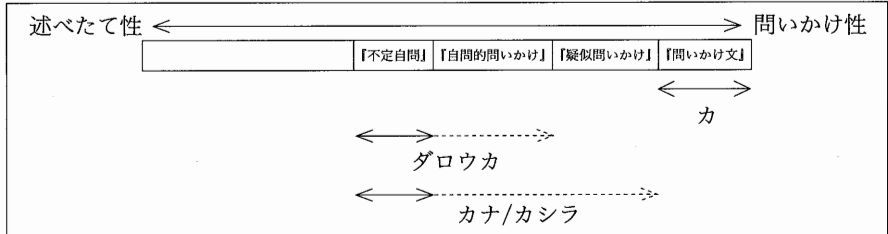
	ダロウカ	カ
「カナ/カシラ」と同様の条件	『不定自問』や『自問的問いかけ』を持つ。→例9、10	二人称の主格名詞句と共起する。→例13
「カナ/カシラ」と異なる条件	二人称の主格名詞句と共起しにくい。対話の状況での『疑似問いかけ』の用法はなし。	二人称の感情形容詞の主格名詞句と共起する。→例14

4. 「カナ」「カシラ」「ダロウカ」「カ」と『問いかけ文』

1.2.2で述べたように、種々の表現が『述べたて文』と『問いかけ文』の二つの文類型によって明確に二分されるのではなく、両者の間にそれぞれの性質を一定の割合で持つ中間的な表現があると考え、問いかけ性をもっとも高いものが『問いかけ文』であり、述べたて性をもっとも高いものが『述べたて文』であるといえることができる。

ここでいわゆる疑問文文末表現の「カナ」「カシラ」「ダロウカ」「カ」がこの文類型の中でどのような位置付けをされるのか、2.と3.で見たそれぞれの使用条件から考えると、次の図のようになる。

図1 「カナ/カシラ」「ダロウカ」「カ」と『問いかけ文』



(\longleftrightarrow) = 基本的な意味・用法 $\cdots\cdots\cdots\rightleftharpoons$ = 派生的な用法)

「カナ」「カシラ」は『不定自問』という基本的な意味から、より問いかけ性の高い『自問的問いかけ』と『疑似問いかけ』の方へ派生している。これに対して、「ダロウカ」は『不定自問』から『自問的問いかけ』までしか派生していない。「カナ」「カシラ」と比べて問いかけ性は低いと思われる⁸。しかし、「カナ」「カシラ」も感情形容詞の二人称主格名詞句の制限から「カ」と比べると問いかけ性が低いことが分かる。

5. 「カナ」「カシラ」の差異

ここでは、「カナ」と「カシラ」の違いをいくつかの現象から示す。ここまでは、命題内の主格名詞句によって使用条件を考えたが、以下では、命題の内容に関する話者の判

断が問題となる。結論から言うと、「カナ」は「カシラ」より述べたて性が高く、『述べたて文』に近似した用法を持つ。一方、「カシラ」は2.と3.で述べたように『問いかけ文』側に移行するが、『述べたて文』側に移行しない。以下では、これを証明する根拠や言語現象を観察する。

5.1 『述べたて文』に接近した「カナ」

「カナ」の『述べたて文』に接近した用法をここでは『個人的な判断・意見の叙述』と仮に呼んでおく。この『個人的な判断・意見の叙述』の用法は、「カナ」の一つの派生的な用法とも考えられ『述べたて文』に近似した特徴を持っている。以下その特徴を述べる。

まず、第一に、『個人的な判断・意見の叙述』の用法では、主格名詞句の人称は必ずしも一人称であるとは限らないが、判断する主体は「話し手」でなければならない。例えば、

16) 「さて、行くカナ。—ああ、いいよ。これくらいは僕がおごる」

「いいんですか」と、智子は言って、「ごちそうさま」と頭を下げた。(眠り、p.127)

17) 「…でも、そういう人も、逃げられるわけじゃないのよ。警察には捕まらなくても、自分の中にあるものから逃げられないんだから」

「良心、ってこと？」

「ちょっと違うカナ」

と、智子は首を振って、「似てるけど、少し違う。」 (眠り、p.275)

18) (AがBに酒を飲みに来ないかと誘うのに対して、Bはその誘いを断ろうとしている)

B: えー、でも、レポート、あー、どうしようかな。

(略)もう一人、なんか、ソフト部の子誘うんならいいカナ。

A: えっ。(会話 a)

16)の主格名詞句の人称は一人称であるが、17)、18)は一人称ではない。しかし、16)～18)に共通しているのは、判断する主体が「話し手」であるということである。16)～18)の「カナ」を「カシラ」に置き換えると、

19) ??さて、行くカシラ。

20) ちょっと違うカシラ(どう思う?)と、智子は首を振って、「似てるけど、少し違う。」

21) もう一人なんかソフト部の子誘うんならいいカシラ(どう思う?)

となり、19)のように非文になるか、20)、21)のように聞き手から助言を求めるという意味合いとなり、判断の主体が「話し手」から「聞き手」に移ることになって、状況と合わなくなる。ここでの「カナ」は判断の主体を「話し手」に止めて、「聞き手」に譲らないという『述べたて文』の特徴を持っていたのである¹⁰。

第二に、「カナ」の『個人的な判断・意見の叙述』の用法には、文末形式と離れた現象であるが、「～と思う」「～という感じだ」「～という気分だ」などのような思考・感情表明の表現との共起という特徴がある。「カシラ」はこれらと共起しにくい。

- 22) 今日は雨が降るカナ/?カシラと思って、傘を持ってきた。
23) 朝が少し冷えるカナ/?カシラという感じですが、日本のように寒くて朝起きるのがつらいというものではありません。(実例)
24) この時期になって、やっと年末カナ/?カシラという気分です。(実例)

「と思う」「という感じだ」「という気分だ」などのような表現は意味的には話し手の主張(判断・意見・解釈・感情)を表すものである。このような意味を持つ表現と共起する「カナ」は、聞き手から情報を引き出す『問かけ文』を作ると考えることはできず、逆に聞き手に未知な情報を与える『述べたて文』に近い文を作ると考えられる。

第三の特徴として、話し手が「カナ」を使って「命題の成立の確定に傾いている」ことを示す現象が挙げられる。24)はそうした例で、「カナ」が「やっと」と共起し、話し手が「その気になってきた」という意味合いを表している。また、

- 25) (AがBをソフトボールの試合に参加するように誘う。)

A: ああ、今度の日曜日に、(はい)¹¹あ、午後なんですけど、時間ありませんか。

B: 4日でしょ?

A: え。

B: え、ちょっと無理カナ。

A: ちょっとだめですか。

B: うん。(会話b)

のような例も、同じように説明できる。つまり、25)では「無理」という内容に対して、話し手はその成立の確定に傾いていることを表している。25)で「カシラ」を使い「ちょっと無理カシラ」とすると、話し手に不明な点がある、すなわち命題の真偽が不確定であるという意味を示してしまうので、状況と合わなくなる。

最後に、「応答」としての「カナ」という現象が挙げられる。安達(1992)は、話し手と聞き手との情報のやりとりの働きに注目して、「平叙文」を「情報提供文」、「疑問文」を「情報要求文」と呼んで、「情報提供文」に近い現象の一つとして「応答」の「ノデハナイカ」を取り上げている。そこで応答文は、先行する文によって要求された情報を相手に与える文であるから、それ自体は情報提供文であると説明されている(安達1992: 55)。本研究でもこの考えに従い、「応答」としての「カナ」という現象があることを示す。

- 17) 「…でも、そういう人も、逃げられるわけじゃないのよ。警察には捕まらなくても、自分の中にあるものから逃げられないんだから」

「良心、ってこと?」

「ちょっと違うカナ」

と、智子は首を振って、「似てるけど、少し違う。」(眠り、p.275)

このように、「カナ」が応答文に現れる例は、「カナ」を使った文が「話し手が聞き手に未知の情報を与える」文—すなわち『述べたて文』—に近づいていることを示す。

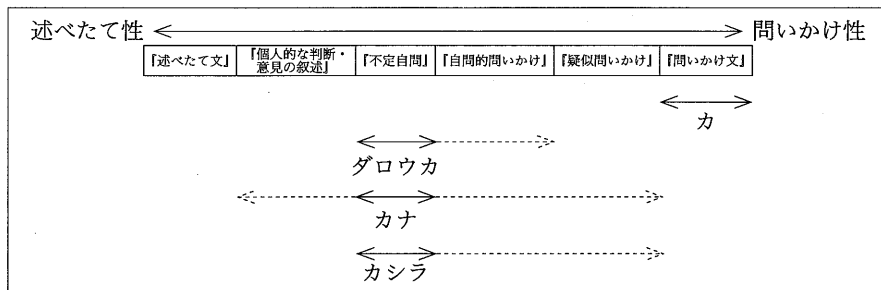
以上、『述べたて文』に接近した「カナ」を説明する四つの現象を取り上げたが、いざ

れの現象も「カシラ」には見られないので、「カシラ」は「カナ」より述べたて性が低いと考えられる。

5.2 「カナ」「カシラ」「ダロウカ」「カ」と文類型の関係

5.1で述べた「カナ」と「カシラ」の差異の結果から、4.の図1を修正して次に示す。

図2 「カナ」「カシラ」「ダロウカ」「カ」と文類型の関係



(\longleftrightarrow = 基本的な意味・用法 \dashrightarrow = 派生的な用法)

6. おわりに

以上、本研究では次の四点について主張した。

- 「カナ/カシラ」は、『不定自問』という基本的な意味を持ちながら、相手に問い掛けるという『自問的問いかけ』と『疑似問いかけ』の用法にも派生していて、その派生したそれぞれの用法での使用条件の違いについて指摘した。
- 「ダロウカ」は、「カナ/カシラ」とほとんど同じ意味を持っていると主張されてきたが、本研究では二人称主格名詞句と共起しにくいという現象から、「カナ/カシラ」より問いかけ性が低いことを示した。
- 問いかけ性の高い「カナ/カシラ」でも、二人称の主格名詞句の感情形容詞と共起できないという制限から、問いかけ文の「カ」とは異なることを指摘した。
- 『問いかけ文』と『述べたて文』の間にある「カナ」は『問いかけ文』側だけでなく、『述べたて文』側にも近づいた用法が見られる。これに対して、「カシラ」は『問いかけ文』側に移行するが、『述べたて文』側に移行した用法はないという点で異なる。

今回の考察においては、イントネーションを考慮せずに「カナ」「カシラ」の差異を考えてきた。「カナ」は実際の発話では「かなあー」と長く伸ばした音であったり、「かな」と短く切られた音であったりするが、それぞれの場合に上昇・下降のイントネーションがある。「カシラ」には長く伸ばした音はないが、やはり上昇・下降イントネーションがある。これらイントネーションを含めた意味・用法の違いの分析が今後の課題となろう。

1 以下カナ、カシラと表す。「カナ」は「カナァ」などの代表形式として用いることにする。また、「カナ」と「ノカナ」、「カシラ」と「ノカシラ」の違いと、「カナ」「カシラ」のイントネーションについては考察の対象外とする。

2 例えば、国立国語研究所(1951)は、「カナ」は助詞「カ」に「ナ」がついたもので、「カシラ」は助詞の一つと位置づけている。

3 例えば、国立国語研究所(1960)では、「カナ」「カシラ」が判断未定の表現の一つである「判断への疑念の表現」に属すとしている。「判断への疑念の表現」とは、他に対する質問に一転しうる形式を持ちつつ、なお意味上、話し手みずからの内部での疑念にとどまると認められるもののことをいう。また、仁田(1991)は、「カナ」と「カシラ」を「疑いの述べ立て」の形式とし、森山(1989)は「聞き手情報非配慮」の表示とし、相手からの応答を期待しないものとしている。

4 「カナ」「カシラ」の差異については、男女差によるものだという説明もある。しかし、「カナ」「カシラ」の差異は本当に男女差にあるのだろうか。実際の電話での会話を録音したテープ(20会話、約45分)とシナリオ(1編)・小説(短編小説21、長編小説3)・対談(1編)から、「カナ」「カシラ」の形式をすべて集めて、男女の使用量を比べてみた。結果は次の表の通りである。(数字は例の数とそのパーセント)

	女性 の 発 話			男性 の 発 話		
	全 (%)	カナ (%)	カシラ (%)	全 (%)	カナ (%)	カシラ (%)
実際の会話	12(100)	12(100)	0(0)	16(100)	16(100)	0(0)
シナリオ・小説・対談集の会話	171(100)	43(25.1)	128(74.9)	78(100)	77(98.7)	1(1.3)

両種類のデータにおいて、男性がほぼ「カナ」を使うのが分かった。「カシラ」においてはデータの種類によって差が見られた。実際の会話のデータから、女性は「カシラ」ではなく、「カナ」を使っている。シナリオ・小説のデータでは、女性が「カシラ」を選ぶのが多くなるが、それでも女性の「カナ」の使用もまだあった。実際の会話とシナリオ・小説などの会話から差が出たが、「カナ」は必ず男性の、「カシラ」は必ず女性の言い方ではないことが分かった。

5 ここでは、狭義の通常疑問文の「カ」の形式だけを対象とする。「反語」や「自問納得」などに現れる「カ」は除外する。

6 「派生した用法」は三宅(1993:66)の「派生的な意味」や益岡(1993:7)の「用法の拡張」を参考にしている。

7 丁寧形である「デショウカ」は、この場合の「ダロウカ」に含まれないとする。「デショウカ」は丁寧形であるため、聞き手のことを直接問い掛けることができ、二人称と共起でき、「ダロウカ」と対照的である。

8 「ダロウカ」が「カナ/カシラ」と比べて問かけ性が低いということを証明できるもう一つの現象がある。「ダロウカ」が「～でもいい」と共起する場合(例、「食べてもいいダロウカ」)、聞き手からの許可を求めている意味とならず独り言という意味にしかならない。これに対して、「食べてもいいカナ/カシラ」は間接的に聞き手から許可を求めている意味合いになる。この現象は、「ダロウカ」は「カナ/カシラ」より聞き手の情報(許可)を引き出す力が弱いことを示すものと思われる。

9 仁田(1988)は「意志動詞」と「無意志動詞」の大別をして、その違いは<自己制御性>があるか否かによると述べている。<自己制御性>とは、動きの発生・過程・達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できるといった性質である。<自己制御性>を持った動詞はいわゆる「意志動詞」で、例えば「行く、歩く、走る、泳ぐ、飲む、食べる、歌う」などの動詞である。この「意志動詞」の特徴の一つは「シヨウ形」という意志表現を形成できるものである。「カナ」「カシラ」が共起する命題の主格名詞句が一人称で、その動詞が意志動詞の場合には、「シヨウ」形を取るのが普通である。

A) (私は) パーティに行こうカナ/カシラ。

この「意志動詞」を「シヨウ形」ではなく、非過去(「スル形」と呼ぶ)にすると、主格名詞が「一人称」

の意味ではなく、「三人称」の意味になることが多い。

B) (彼は) パーティに行くカナ/カシラ。

しかし、「さて」「よし」など意志を表す副詞と共起する場合に「カナ」は、意志動詞の「スル形」でも主格名詞の一人称の意味として捉えられる。この場合「カシラ」は不自然になる。

C) さて、行くカナ/?カシラ。

D) よし、走るカナ/?カシラ。

10 A) 彼は日本人です。

のような『述べたて文』において、「彼が日本人だ」と判断する主体は「話し手」である。そして、

B) 彼は日本人ですか。

のように「か」をつけて『問いかけ文』とすると、判断主体は「聞き手」に移行するのである。

11 ()内は「相手の相づち」を表す。

引用文献

安達太郎 (1991) 「いわゆる「確認要求の疑問表現」について」『日文学報』第10号 大阪大学文学部日本語研究室

安達太郎 (1992) 「傾き」を持つ疑問文—情報要求文から情報提供文へ—『日本語教育』第77号 日本語教育学会

木村英樹・森山卓郎 (1992) 「聞き手情報配慮と文末形式 一日中両語を対照して—」『日本語と中国語の対照研究論文集 (下)』大河内康憲編 くろしお出版

国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞—用例と実例—』国立国語研究所報告3 秀英出版

国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型(1)』国立国語研究所報告(10) 秀英出版

仁田義雄 (1987) 「意志動詞と無意志動詞」『月刊言語』第17巻第5号

仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

牧原功 (1994) 「間接的質問文の意味と機能—グロウカ、デショウカについて—」『筑波応用言語学研究』筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科

益岡隆志 (1987) 「プロトタイプ論の必要性」『月刊言語』第16巻第4号

益岡隆志 (1993) 「日本語の条件表現について」『日本語の条件表現』益岡隆志編 くろしお出版

三宅知宏 (1993) 「派生的意味について—日本語質問文の一側面—」『日本語教育』第79号 日本語教育学会

森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』仁田義雄・益岡隆志編 くろしお出版

調査した言語資料

実際の電話での会話を録音したテープ(20会話、約45分)：1994年6月～9月に録音して文字化した会話。(男性11人(20代後半～30代)、女性13人(20代～30代))

シナリオ：『大人になるまでガマンする』山下太一 大和書房

小説(短編)：「朱いドレス」「紙の女」「俺と同じ男」「西瓜流し」「鈍色の眼」「鳥」「藁の人形」「待っている男」阿刀田高 角川文庫、「天国に近いプール」「不透明な蜜室」「緑の扉は危険」『蜜室殺人事件』阿刀田高 角川文庫、「殺人計画」「ゆきどまり」「女に向いている職業」「消えた輝き」『やっぱりミステリーが好き』雨の会編 講談社、「理由なき反抗」「残酷な天使」「赤い証言」「最上の策」「毒の女」「第三の罠」「ツタンカーメン王のえんどう豆」『ミステリー大全集』赤川次郎編 新潮文庫

小説(長編)：『男女七人夏物語上・下』鎌田敏夫 角川文庫、『眠りを殺した少女』赤川次郎 角川文庫、『殺人者K』鎌田敏夫 双葉社

対談：『向田邦子全対談』(小野田勇、水上勉、江國滋との対談のみ)向田邦子 文春文庫

例文出典

朱い・待って＝「朱いドレス」『待っている男』阿刀田高 角川文庫、大人＝『大人になるまでガマンする』山下太一 大和書房、西瓜・待って＝「西瓜流し」『待っている男』阿刀田高 角川文庫、眠り＝『眠りを殺した少女』赤川次郎 角川文庫、緑・密室＝「緑の扉は危険」『密室殺人事件』阿刀田高他 角川文庫、雪・やっぱり＝「ゆきどまり」『やっぱりミステリーが好き』雨の会編、理由・ミス＝「理由なき反抗」『ミステリー大全集』赤川次郎編 新潮文庫、会話 a-b＝筆者が1994年6月～9月に録音して文字化した電話での会話、実例＝実際に使われている例。
出典の明記のないものは作例である。

付記：本稿をまとめるにあたり、筑波大学の高田誠先生に有益なご教授をいただいた。また、国立国語研究所の井上優氏から貴重なコメント、ご助言をいただいた。心から感謝の意を申し上げる。

(筑波大学大学院 博士課程文芸・言語研究科 応用言語学)